

---

# ふゆこさんの場合

千鶴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ふゆこさんの場合

### 【Nコード】

N2220Z

### 【作者名】

千鶴

### 【あらすじ】

異世界トリップしちゃった彼女の場合、第五段。

少し口の悪い芙由子さんは、ある日突然召喚されてしまいました。彼女は一体どうなってしまうのでしょうか。

生まれ育ってはや15年。

反抗期も手伝って、色々して参りましたし、色んなところへ行きました。

普通の女の子よりは、御転婆だった自覚もあります。

告白すれば、先生たちには多大なご迷惑をかけておりました。

しかし、しかしですよ、このような事態はさすが酷いのではないかと思います。

・・・神さま、異世界に飛ばされちゃう程、私は悪い子だったのでしょうか。

とかなんとか、モノローグっぽく悲嘆に暮れていた時も確かにあったと後になって振り返り、我ながら馬鹿だなあなんてことを思う。しかしそれも今やどうでもいいことだ。

大事なのは、今、これからなのである。

そしてその未来は、己が切り開いていくしかない。

芙由子は、こちらへ来て10日めで、ある種の悟りを開いていた。

「いや、まじもう何でもいーから、帰して」

「そっそれは出来ません」

「帰せつつってんだろ、出来ねえじゃねんだよやらねえんだろお前ら。なあ？」

「ひっ」

「ちよい、そのあんた、人の顔見て悲鳴上げるとかなんなの。ざっけんなよ、誘拐犯のくせに」

「ぎゃーとばっちり！すみませんすみません謝りますっ」

だからお願い胸倉つかまないでー！

「・・・何度見ても、変な図ですねえ・・・」

「「さ、宰相様あああつ助けて下さいー！！」」

「あん？ちっ・・・何よ、文句あんの」

「いえ・・・とりあえず、フユはその手を放してあげてくれませんか」

かつんと靴音を響かせて現れた男は、着て早々、目の前の光景に大きな溜息を吐いた。

フユと呼ばれた少女は、捻りあげていた白いローブの男の胸元を、舌打ちしながらもぺっと解放する。

確かにこの光景は傍から見ても異常であった。

何しろ、まだ幼さの残る少女に、大人の男が胸倉を掴まれ、凄まれ

ていたのだから。

おまけに、よく見ればその周りにも、また2人の白ローブの男たちが床に転がっている有様だ。

先ほどからずっと、終わらない押し問答を繰り返していたせいで、フユの機嫌は今底辺を這っている。

愛らしい顔を凶悪に歪ませて、眼光鋭く宰相に縋りつく男たちを睨み据えた。

「まじこいつらなんなの？役に立たねーわへたれだわ。神官とか名前ばっかりじゃん」

「そう言うのなら、連日攻め立てるのはやめてあげてくれませんか」

「ははっ。ぜってえやだ」

「フユ、そのように女の子が汚い物言いをするのではありませんよ」

「・・・アリーシャさん」

忌々しげに吐き捨てたフユの言葉に、白い神官服を纏った男たちが落ち込んで床に縋りつく。

宰相の後ろに続いて現れた、母親程の年齢の女性に窘められ、フユはバツの悪い表情になった。

不服そうな顔を隠さないのは若さ故か、フユの気性がまっすぐであるせいなのか。

アリーシャはフユへと近づくと、先ほどまで暴れていたせいで乱れた衣服を整え始めた。

「い、いいよ、アリーシャさん・・・そんなしなくても」

「いいえ、なりません。ただでさえそのようにはしたない格好をしているのですよ。」

これ以上乱れさせては周りの為にも良くありませんからね」

フユの着ているものは、フユが生まれ育った世界のもので、中学校の制服だ。

多少着崩して改造しているせいで、スカートは膝より10センチ程上くらいの長さしかない。

フユにしてみれば当たり前だが、それはこちらの世界の感覚で言えば非常識であり、有体に言えば破廉恥だと思われる。

それを教えられて尚、フユはこちらの世界の衣服を断固拒否していた。

比較的早く懐いたアリーシャにも、そこだけは押し通している。

気まり悪げに、しかし緩々と抵抗していたフユは、やがて諦めたのか大人しくなった。

他人には傍若無人に振舞うフユも、何故かこのアリーシャには敵わないのだ。

それは、自身の母親を彷彿とさせるからかもしれない。

「フユ、もう夕食時です。」

宜しければ、陛下が共に食事をしないかと仰っておられますが」

ひと段落ついたとみた宰相が、フユへと声をかけた。

フユはまだアリーシャにされるがままになっていたが、その言葉に瞬時に返事をした。

「やだ」

即ち、拒否の意。

つーんと顔を明後日の方向に向けて、わざと宰相の方を見ようとし

ない。

それを予想していたのか、苦笑した宰相が了解したと首肯しようとした、そのとき。

「フユ!!」

ばあんっと派手な音を立てて扉が開かれ、また新たな人物が現れた。フユはそれを視界に入れ、瞬時に嫌そうに顔を歪める。

アリーシャは相手の登場を見て少し後ろに下がってしまった為、遮ってくれる壁もない。

せめてもの抵抗と宰相の背に隠れるも、腕を掴まれあつという間に引き出されてしまった。

「・・・陛下、また執務を放棄なされたのですか」

「ちょっと触らないでよ!馬鹿王!いい加減あたしを家に帰せっ」

じたばたと暴れるフユをものともせず、愉悦に口の端を歪めた男は、フユの体を軽々と腕の中に収めた。

宰相が胡乱な眼で見つめることすら意に介せず、ぐりぐりとフユの頭に頬を擦りつける。

勿論、宰相の台詞はまるっと無視だ。

「うぎゃあやめろ変態っロリコンっセクハラー!!」

「ははは、お前の為なら変態にもなろう」

「意味わかんねーから!いやああ変なところ触んなうざいきもい変態  
いいいい!!」

「ああ、お前の声は相変わらず可愛らしいな」

「きっしょいんじゃー！ー！ー！」

「陛下・・・」

最早諦めてはいても、宰相は涙が出てくるのを禁じ得なかった。  
何が悲しくて、主君がまだ幼い少女を襲う姿を見なければなら  
ないのだろうか。

くつと眉根を寄せて耐える姿はなんとも様になるのだが、本人の  
心は如何ばかりであろう。

神官達ですら、何ともいえない顔でその光景を遠巻きに眺めている。  
アリーシャは侍女頭としての立場故か顔には出さないが、笑顔が非  
常に固い。

その内心は推して知るべしである。

そして捕まえられた当の本人は、往生際の悪さを發揮して、尚も逃  
れようと足掻いていた。

「まじありえん・・・何なのほんと・・・！」

ぐぐ、と自身の身に回された王の腕から逃れようとしながら、フユ  
が呻く。

どれだけ叫ぼうが暴れようが、王の手からは逃れられない。

それはこちらへ着て10日目の日に思い知った。

それでもフユは大人しく構われる気も、ここに残るつもりもない。

猪突猛進型のフユの頭には、抵抗あるのみだ。

嬉々として自ら誘いを口にした王に、即座に否やを唱える。



「フユ、夕飯は共に」

「やだっつーの！何回言わせんだよ！あんたと一緒なんかぜってー嫌！！」

「ふむ、つれないところも愛いものだが」

「きもいいいいっ鳥肌たった鳥肌！アリーシャさーんっごみがここにいるからすぐ捨ててきて！」

「フユ、陛下をごみ呼ばわりはいけませんよ」

「だってごみだよこんなロリコン！こんな有害物質放置しちゃだめだよ！！」

「フユ・・・陛下・・・」

「はははまったくフユは愛らしいな」

「いやあああまじ話通じない！もういやっ帰るっ家に帰るううううう！！還せよ馬鹿ー！」

フユが全力で抵抗するも、軽く王に往なされる始末。

宰相はフユの暴言についても王の振る舞いについても、言葉にならない様子で遠くを見つめていた。

アリーシャは一度フユを窘めたあとは、また置物のごとく控えている。

遠く離れたところに避難しつつそんな光景を見守っていた神官達は思った。

何このカオス。

そもそも、実際にフユを召喚したのは、ここに居る神官達である。その目的は『王の癒しとなる存在』を、異世界から呼び寄せるといったものだ。

今はこのような姿でも、以前は賢王と称えられ、執務には非常にまじめに取り組んでいたのだ。

まじめに取り組み過ぎて周りからその身体を心配される程、身を粉にして働いていた。

そんな姿を見ていた者たちは、何か王の支えとなるものがないかと考え、思いついたのが召喚術だった。

初め、神官達の想定では、ふわふわもこもこの小動物が居ればいいだろうくらいの認識だったのだ。

まさか召喚陣が誤作動を起こし、異世界の人間を召喚してしまうとは思ってもしなかった。

そして、その人間を王が異様に気に入ってしまうということも、もちろん想定外の出来事で。

本来ならばすぐに還してあげるつもりだったのだ。  
王が、お気に入り異世界に還することを拒むまでは。

「いい加減触んなくなって言っただろーがああ！」

「フユに触れないなどしたら我は死んでしまう」

「変態は死ねっ今すぐ崖から飛び降りて死ね！」

「つれないな、フユは。そこもよいのだが。」

しかしフユの世界ではこういうのをツンデレというのだろう、知っておるぞ」

「誰がいつデレたってんだよきもいこと言ってるじゃねー！」

糠に釘。

暖簾に腕押し。

フユの言動すべてが王にとっての喜びに取って代わるため、抵抗は初めから意味を成さない。

それを知りながら、宰相やアリーシャ、周りの者たちは、フユに忠告をしようとはしなかった。

何故なら、それは王から止められているからだ。

曰く、今のままのフユが好ましいとかで。

「さわるなああああ！！」

「うーん、やはりフユは良い。癒される」

すりすり頬を寄せ、恍惚とした表情を見せる己が主を、宰相はもはや遠くを見るような眼で見つめた。

何がどうしてこうなったと、思わずにはいられない。

初めは、異世界から召喚された少女の処遇について、王の気が済んだ段階で還せば良いと思っていた。

フユはこちらに着たばかりの頃、現実を理解出来ないのか、呆然自失状態だったのだ。

抜けがらと言ってもいいふぬけたその様は、王に若干の憐みを抱かせただけだったのだから。

召喚陣は調整もあって、すぐには起動出来ず、10日の猶予が必要となった。

そして、帰還予定当日である10日後、それは一変した。

帰還出来る喜びか、光の灯らなかった瞳に生気が宿り、フユはまるで別人になったように変わった。

それが本来の彼女であることは理解も出来たが、本当に呆然自失の

時とは180度違う様だったのだ。

宰相は勿論、府抜けた彼女を知る人間は皆一様に驚いたが、それだけなら全く問題はなかった。

そして最大の誤算は、王がその姿を見て、完全に見る目を変えてしまったことだった。

「なんなのつまじいい加減にしろこのばか！仕事しろよ！！」

「休憩だ」

「とかいって1時間前にも来ただろーが！！」

王の腕に抱き上げられたフユが、顔を真っ赤にして怒鳴る。

それが怒り故か、王の顔が非常に近いせいかは、本人しかわからないが。

小柄で華奢な体躯の何処からそのような怒声が出るのか、見当もつかない。

桜色の小さな唇から零れるのは、大体にして罵詈雑言だ。

少女の見た目には非常に似合っていない、野蠻で下賤な言葉である。そんな言葉を駆使する異世界の少女は、けれど決して人に危害を加えたりしないようだった。

脅しはするし、胸倉を掴んだりヒートアップするとしてしまうこともある。

しかしフユの性根が真っ直ぐで、実は存外純粹であることを、今は皆が知っていた。

だからこそ、王に溺愛される彼女に対し、この王城で働く者達は基本好意的だ。

そして好意には好意で返すのが、フユという少女である。

ただし、その中に、王が含まれていないのは言わずもがな。

「・・・・・・・・・・疲れた」

散々叫び、暴れたフユは、今や王の腕の中でぐったりとしている。今日もフユの負けか、と宰相は内心で呟いた。

王は成人男性であり、おまけに鍛えている。

その力に、非力な十代の少女が敵うわけがないのだ。

涙ぐましいフユの努力は、大抵水の泡となることを、フユ以外は理解していた。

しかし彼女はそれを頑として諦めない。

元の世界へ還りたいと、そればかりを望むのだ。

王はフユを気に入っていて、彼には正妃も側妃もない。

故に、彼女が望むなら、きっと王は誰に反対されようと、フユを正妃に据えるだろう。

それこそ、王が望んで止まないことなのだから。

そうすれば、彼女は悠々自適な生活を手に入れられる。

玉の輿もいいところだろう。

普通の女性ならばそれを選ぶと思っていた宰相は、未だに拒むフユが不思議でならなかった。

「・・・・・・・・陛下、ついだと申してはなんですが、お食事を先に召し上がっては？」

フユが抵抗しない今が好機、このまま連れて行ってしまうと暗に告げてみた。

その言葉を聞いたフユがちらりと睨みつけてきたが、早々に諦めたようで、すっかり王に身を任せている。

実際、今は夕餉の時間を過ぎた頃だ。

フユも空腹を感じたのだろう、ちらりと王を窺い、ぽんぽんと王の腕を叩いた。

「ご飯、食べるから、離して」

「そうか、では」

「ちよっ・・・」

フユの言葉に、王がひとつ頷いて、くるりと踵を返した。もちろんフユはまだその腕の中である。

王の行動に、反射的に突っ込みかけて、フユは諦めたように嘆息を零した。

相当疲れているらしい彼女の様子に、宰相が苦笑を湛える。

そうして決して口に出すことなく、内心だけでフユへ話し掛けた。曰く、

もう、逃げられないのだから、諦めてしまいなさい。

・・・と。

宰相は王が立太子した頃からの付き合いで、彼の性格を誰よりも理解していた。

周りには生真面目が過ぎると思われていたようだが、実際は少し違う。

ただ、やることが執務以外になかったただけなのだ。

他に興味を持つこともなかった為に、ただただ執務をやり続け、賢王と称えられる結果になったに過ぎない。

つまり、王にとっては、今やフユ以外は取るに足らないものなのだ。それこそこの国として例外ではない。

フユと国を天秤にかけた場合、王は迷いなくフユを選ぶだろう。

だからこそ、思うのだ。

抵抗することを諦めて受け入れたほうが、フユの精神的にも良いはずだと。

王がフユを手放すことは絶対にあり得ないのだから。

彼女は、生涯、万が一王が先に死なない限り元の世界には帰れない。

ご機嫌で食堂に向かう王と不承不承な面持ちで運ばれるフユを見送りながら、宰相は彼らとこの国の未来を思っ、今日も1人嘆息するのだった。

こうして、フユ————芙由子は、知らないうちに異世界にて捕らわれた。

彼女がそれを知るのも、今後彼女がどのように生きていくのかも、ただ神のみぞ知る。

とにもかくにも、現世で話題の異世界トリップ。

これは、蜘蛛の糸に絡め捕られるように1人の男に捕まってしまった、芙由子のお話である。

**(後書き)**

王が何故ツンデレなる言葉を知っていたのかという謎。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2220z/>

---

ふゆこさんの場合

2011年12月13日01時01分発行